進化倫理学における経験的研究と機能を用いた説明の可能性

清末 もも（Momo　Kiyosue）

九州大学人文科学府博士後期課程

進化倫理学とは、ダーウィン（Charles Robert Darwin）の主張した「人間の道徳心は進化の結果獲得された」に端を発したものであり、進化論と倫理や道徳の性質の関係をめぐる議論を扱うものである。

ダーウィンは『種の起源』(1859)において生物の進化について著した後、1871 年に『人間の由来』を出版し、人間の進化について詳述した。その中でダーウィンはとりわけ人間の心的能力に着目し、心的能力一般も進化の結果獲得されたものであることを主張した。更に進化論の反例になることが危惧されていた「協力行動」や「利他行動」を促すと思われる人間の「道徳心」についても、進化の結果獲得された心的能力であることを示し、「協力行動」や「利他行動」ひいては「道徳心」の存在は適応度をさげるため進化論の反例となるという主張を否定した。また、この道徳心の進化は「群淘汰」という仕組みによって成立するとダーウィンは述べた。「群淘汰」とは、個体の淘汰のみでなくある集団(群)単位でも自然淘汰が起きるという理論である。利他的に行動する集団は利己的に行動する集団よりも結果的に生き残りやすいため、利他的に行動するような心的性質が生物の心的性質として存続したというものである。その最たるものとして人間の道徳心があげられるが、「群淘汰」とは人間に限らず、蜂などの利他行動の存在も進化論的に説明するものだとされた。

その後ダーウィンの主張に影響を受けたスペンサー(Herbert Spencer)は 1879 年「倫理学のデータ」において「進化論による道徳の基礎付け」を行うことを目指した。その中で彼は「①道徳心は進化の結果獲得された　②進化は個体と種の保存を目指す（すべての個体が快適に過ごせる共同体を目指す）③よって、より進化した行為をすべきであり、すべきことは全体の快の量と質を増やすことだ」と主張した。しかしこの主張は「事実のみから規範的な主張を引き出している」としてスペンサーの死後否定されることとなった。

スペンサーの死後、三四半世紀にわたり、進化と倫理を巡る議論は日の目をみなかったが、1970 年代になり当該分野は再び検討されることになった。その皮切りとなったのは 1975 年にウィルソン(Edward Osborne Wilson)によって発刊された『社会生物学』であり、彼はその中で「動物行動学における進化論的主張を人間にも適用できる」と主張した。また 1976 年ドーキンス(Clinton Richard Dawkins)によって出版された『利己的な遺伝子』によってこの議論は更に白熱することとなった。その影響は倫理学にもおよび、ここに進化倫理学は再び倫理学の一分野として議論されることとなった。

しかしこの現代の進化倫理学には、初期のスペンサーによる進化と倫理の関係をめぐる議論が孕んでいたのとは別の 2 つの問題を抱えている。今発表はこれらの問題の解決

の糸口を提示することを目的とする。

まず現在の進化倫理学は大きく分けると、「進化によって人間の道徳心が獲得された経緯が説明されるのであれば、倫理や道徳は存在しないことになる」と主張する「進化論的反実在論」と、「進化によって人間の道徳心が獲得された経緯が説明されるのであれば、その説明に沿った形で倫理や道徳の実在は説明される」と主張する「進化論的実在論」に大きく分けられる。しかし進化論的反実在論者は「道徳」とは自然的事実に関係しないものであると捉えているのに対し、進化論的実在論者は進化論的事実に関わる形での「道徳」を想定しているため、両者が「道徳」という言葉で意味するものが異なり、水掛け論に陥ってしまっている。これが 1 つ目の問題である。

2 つ目の問題は、進化倫理学の根本に関わるものである。進化倫理学は基本的に「群淘汰の理論の理論を用いて、進化の結果人間の道徳心が獲得されたと言える」という進化論における主張と倫理や道徳の実在性や性質に関して議論を重ねている。しかし現在の進化生物学では「群淘汰」は生物の適応度を下げることから否定されており、この進化倫理学が基礎にしている「群淘汰の理論の理論を用いて、進化の結果人間の道徳心が獲得されたと言える」という主張も否定されている。更に現在の進化生物学では「群淘汰」に代わり人間の道徳心を進化論的に説明する体系的理論は存在していない。つまり現代の進化倫理学は崩された基礎の上に積み重ねられているのである。

これらの問題に対して発表者は以下の解決策を提示する。

まず 2 つ目の進化倫理学が基盤にする進化生物学的理論については、現在進化心理学や進化生物学、動物行動学などにおける、道徳心や道徳行動に関する経験的研究結果を示す。そのうえで現在の進化生物学において「群淘汰」の代替説として人間以外の「道徳的」行動を説明するための理論として用いられている「互恵的利他行動」が、人間の道徳的行動やひいては道徳心を説明することを示し、人間の道徳行動や道徳心が現代の進化生物学理論において説明できることを示す。「互恵的利他行動」とは他個体に利他行動をすることが結果として自身に利益をもたらす仕組みができている場合、利他行動が適応度を下げないことを説明する理論である。

次に 1 つ目の問題点に対しては、「進化論的不可知論」といえる立場をとるジョイス(Richard Joyce)の理論を用いながら、「機能」と進化を結び付け「進化論的実在論」をとる徳倫理学の立場を改良することで、「進化論的実在論」をとることができ、「進化論的反実在論」と「進化論的実在論」の水掛け論を解決することができることを示す。進化倫理学を徳倫理学的に解釈する進化論的実在論者にはライト(Larry Wright)などがいる。彼らはアリストテレス流の「機能」の説明は進化論的な「選択」を用いて解釈することができると主張する。そのうえでその選択の内容について、人間のあり方に関連付けて議論する。